

ニルンスト・ベルンハイム著

講座

# 史學研究法 (二八)

小林秀雄 譯

## 目次摘要

第一篇 緒論	一
第二篇 方法論	一一九
第三篇 史料篇	一八一
第四篇 考證篇	二八四
第一章 眞偽の鑑定	二九二
第二章 史料の外的決定	三七一
第三章 校正及び出版	四三一
第四章 史料の內的決定	四八五
第五章 史料相互の鑑査	五三九
第六章 事實の總判定	五五五
第七章 考證された材料の整理	五六一
第五篇 史論篇	五七四
第一章 解釋	五七八
一 遺物の解釋	五八〇
二 記録の解釋	五八八
三 史料相互の解釋	六一一
第二章 綜合	六二四

「史學研究法」掲載號目次

卷一		卷二		卷三	
第一回	頁	第一四回	頁	第二七回	頁
第一回 (一ノ一)	一五	第一五回 (四ノ二)	一五九	第二八回 (八ノ二)	四〇五
第二回 (一ノ三)	二七	第一六回 (四ノ五)	一八一	第二九回 (八ノ三・四)	四三一
第三回 (一ノ四)	三一	第一七回 (四ノ六)	一八九	第三〇回 (九ノ二)	四八五
第四回 (二ノ一)	四一	第一八回 (五ノ一)	二〇四	第三一回 (九ノ三)	五一三
第五回 (二ノ二)	五一	第一九回 (五ノ三)	二二一	第三二回 (一〇ノ一)	五三九
第六回 (二ノ三)	六一	第二〇回 (五ノ五)	二四八	第三三回 (一〇ノ四)	五四三
第七回 (二ノ四)	六九	第二一回 (六ノ一)	二五八	第三四回 (一一ノ一)	五五三
第八回 (二ノ六)	七七	第二二回 (六ノ三)	二八四	第三五回 (一二ノ二)	五六一
第九回 (三ノ一)	九四	第二三回 (六ノ五)	二九二	第三六回 (一三ノ一)	五七三
第一〇回 (三ノ二)	一〇四	第二四回 (七ノ二)	三〇九	第三七回 (一三ノ二)	五八七
第一一回 (三ノ三)	一一九	第二五回 (七ノ三)	三三五	第三八回 (一三ノ三)	六一一
第二回 (三ノ五)	一二九	第二六回 (七ノ四)	三五二		
第三回 (三ノ六)	一三九				

### 3 史料相互の解釋

史料が全體として、また個々として、與へられた補助法の及ぶ限り、それぞれ解釋されたとしても、まだ重要な補助法が残つてゐる。考證が史料の相互鑑査によつて擴大されたと同様な方法で、史料及びその報告の解釋が他の史料或は個々の史料文句によつて擴充されるのである。

(a) ここには、提出されてゐる史料と之に多少關聯してゐる類似のものとの關係を考ふる。一つの史料が他の史料から引用されてゐる場合、常に後のものとの比較により初ものが説明され得る。實際屢々このものには簡略で、不明瞭で、不定であると思ゆるものが、かのものには詳細で、明瞭で、明白に現はれてゐる。之は既に、簡単な引用や、再製などに見られるものである。

假令はドイツ大史料證文集第一、第一六九頁三六のアインハルツ年代記に意味されるものは、カロロ大王が六名の願によりてベネント人に平和を保證したことが明かである *dictū etiam unioris respectu* とあるが、明かにアインハルツの再製である。ラウリス・ゼンズ年代記のこの行 *Al. G. I. c. 168, 34f.* を比較すると、その行は *Thue dominus ac gloriosus rex Carulus respexit unum cum suorum vel eorum alimtus suis, ut non terra deleatur illa et ejusque pia vel monasteria non desertantur* といふのである。

同様に、吾人は屢々文書の草案及び下書から、ことに古文書にあつては、所謂豫備文書から請書或は正本を理解すべき説明を得る。長い間の交渉が行はれて、その個々の階段が文書となつて保存されてゐる事務書類などにあつては、之が大仕懸に應用し得られる。かゝる文書の深い知識と比較によつて、決定文書が全體として、また個々として屢々どこまでも非常に透明に、また明瞭にせられる。

之に關する通例はニール・ワイツゼッケルの出版にかゝるドイツ議會書類、卷四、第一頁（ヘルマン王立科學會研究、哲學及び史學部紀元一八八八年）のワイツゼッケルの研究、ループレヒト王認可の文書について *Jnl. Weiskelken, über die Urkunden für appan-tien König Ruprechts*）では法王のループレヒト王に關する許可狀に於ける政治的に重要な文句の意義は、この文句が交渉の經過中に草案及び反對草案中に置かれた種々なる語法によつて、適宜に知られるものである。他の例に同書、第五卷、第九頁、同第七一四頁を見よ。——ウオームス協約についても根本的の説明は、紀元一一一一年から同一一一九年に至る準備交渉及び準備文書の比較から得られる。——ニール・ベルンハイムのシオームス協約及びその準備文書 *E. Bernheim, Das Wormser Konkordat und seine Vorarbeiten* 1906（オースギルケの出版にかゝるドイツ國家史及び法律史研究、第八十一分冊）

吾人が既に史料解釋及び文學的記錄の節に述べた「模倣」の現象も、之が存在する場合には、解釋によつて偶然價值あるものとなる。史料の相互鑑査の處に述べた現象、吾人が後の關係及び事實に於て全然直接な説明を發見し得ない規定が古い前史料から採用されてゐる場合なども、同様である。

かくてドイツ皇帝の選舉令には、帝國の最後の時代に至るまで、紀元一五一九年のカロロ五世の最初の勅令、また次のものから文字通に多數の條項が採用されてゐるが、之は只成立時代の關係に適合するもので、またこの點からのみ理解されるものである。

要するに、史料の類似關係の存する場合、常にかゝる要件が補助法となり、屢々之が非常な達限に及ぶ。法律、制度、習慣、神話、傳説等共通の根本より生じ、或は互に引用されるものにあつては、殊に然りである。事實列相互の全體の大きな關係は解釋の上に或役割を演ずるもので、假令はクリスト教のロゴス説を之に先立つギリシヤ的、東洋的哲學的觀察によつて、ローマンス語をラテン語によつて、紀元十九世紀前半のドイツ憲政運動をフランスの憲政運動によつて説明するときは、之である。ことに只に簡單な、直接な親似關係が觀察されるのみならず、幾多の關接な

ものも有力であり、價值あるもので、上に記した制度關係の説明について主としてフランス憲法の影響を受けた北米憲法を、中古の組合學說の認識について古代及び教會法的觀念の多様な基礎を、吾人の古典文學の理解についてギリシヤの範例からローマ及びフランスの範例までの類似的繼續せる順列を考ふる如きは、之である。

先きに「史料解剖」の節に説明した最も複雑した從屬關係が解釋に役立ち得ることは、上に挙げたニール・ワイツッケルのゲルマン法の相續順の研究 *Jnl. Ficker, Untersuchungen zur Entstehung der germanischen Rechte* 1891 が與つてゐる。——最も明白な例を併するものはフランス革命の憲法、紀元一八一四年と同一八三〇年のシマルト、紀元一八三一年のベルギー憲法、現存の「ロシヤ憲法並に紀元一八四九年のドイツ憲法で、その幾多の個々の箇條の語彙に至る研究は形式及び内容の根本的説明を與ふるのを見る。

最後に、ある史料の説明が他の之と關係のないものによつて取扱はれる。ことに史料鑑査の際の如く、種々なる史料種類の一致が相互に補助し得る。

(b) 一、物語史料或はそのものの個々の文句が他の解釋を助ける。

假令はオットー・フォン・フライシングがその年代記、卷七、第十八章に、彼はロタール三世がリッヂツツに於いて法王に申出した *in quantum regnum a more ecclesiasticum attendunt, investituram ecclesiasticam quanto sui dispensio romiscet* 即ちハインリッヒと五世になる傳承の僧職任命の問題か、或はロタールのその上の讓步、ウオームス協約の問題かを申出したといふ場合、何を考へてゐるかは疑問であるが、之に先立つ第十六章にハインリッヒがいつてゐる文句 *investituram episcoporum legato apostolice sedis obsequio resignavit…… pro hinc ecclesia…… in angustis mentem exersisse sub Galixto papa secundo invenitur ad* 第七卷の「フロッグ」から見ると、オットーはかゝるロタールの讓步については全然物語つてゐないのだから、初のものが考へられたといふことになる。かの文句の意義はその外にエロナルドの聖ペルナルド・ノオン・クレールボアの傳記のロタールについて談じてゐる文句によつて説明される。 *signum imperium idem rex instituit, tempus habere se replevis appetitum*、



(614)

episcoporum sibi casibus investitus, quos ab eius pseudocessere imperatore Henrico……Roman ecclesia vindicant.

(5) 二、遺物は他の遺物によつて解釋される。

紀元一六五三年ツールノーに發見された墓地が武器及び紋章によつてメロヴィンゲン朝の物であることは、この際存在してゐる印章指環に “Chilperici regis” の文字を有することから明白になつた。——古文書が屢々ある現存する反對文書により交渉書類が、交渉に關係ある書信により、書翰が他の書翰によつて説明される。假令は大僧正マールベルク・フオン・マインツが皇帝ハインリッヒ五世の死後新しい選舉の召集に教會及び王國の爲に十分用心をして餘さず、quod tanto servitus ingo amodo eorum et suis legibus uti liceat(Mon. Germ. ILL. II. 180, 2. novo Auflage Legum sectio IV. Constitutiones et acta publicum imperatorum et regum 1893. ILL. I. S. 165. 29)と云ふ不明な語法を用ひてゐるが、吾人は彼がウオームス協約の決定後直ちに法王ノ書を送つて(マツフエのゲルマンに關する字書、卷五、第五一八頁 Ph. Jaffé, Bibliotheca rerum Germ. ILL. V. 519) 協約の決定及び之に相當する從來の法律の改正を承認した詞 (Immobilia enim per omnem motum et fixa esse: precepta non dubitant, quae ad tuncam et corroboranda libertatem Christi et exclusivae aeternae lege sancta sunt) からして、彼がウオームス協約に伴ふ教會政治的狀態をば選舉の召喚に於ける「奴隷の軛」を以て考へたことが判るが、之は彼の他の書翰(マツフエの前著・卷三・第三九四頁)に、彼が認めてゐる sit non absolute potestas imperatori conceditur suaviendi in quatenusque istum episcopatum, reliquis dilectis, qui cum ecclesia Dei permanserunt, sanctum et intolerabilis pensatio generabiturと云ふ詞で説明されてゐる。

(c) 物語史料と遺物との相互的解釋は非常に有效である。第一に、かのものを後のものによつて解釋することである。物語史料の一般に不明瞭と考へられてゐるものが屢々古文書及び事務書類によつて鑑査され、また屢々吾人は報告者が單に外的經過を不明瞭に報告してゐる場合、古文書及び事務書類によつて事件の内的経路の端倪を得るのである。

る。

ウオームス協約に關してはオットー・フオン・フライシングの報告、年代記、第七卷、第十六章、フレデリック傳、卷二、第六章、また紀元一一五六年のオーストリア權利狀(傳卷二第三二章)に關しては、それに關する古文書を比較すれば足る——イー・エー・フリーマン歴史研究法 E. A. Freeman, The Method of historical study 1886 第二五四頁は例によつて、この種の解釋を説明してゐる。

然し遺物は更に高い程度に於いて物語史料による解釋を必要とする。狹義の遺物は大抵は沈黙し、生命を失ふてゐるもので、之が物語史料によつて知られる事實との關係によりて初めて生命を得、また理解される詞を談るのである。

假令はトイドブルクの森の地方のある發掘物は、時代の歴史記述家によつてその戦争が告げられてなかつたとせば、之がローマ人とゲルマン人との間の大戦の遺物として説明することを得ない。民族移動の年代記によつてベンダル族がアフリカを支配してゐたことが告げられたければ、アフリカに發見された武器が如何なるゲルマン民族に關してゐるかを明にすることが出来ない。また物語史料によつて、常にフランク定住の二三の主眼が何處にあつたかが教へられなければ、フランクの居住及び征服に關する結論が引出されるhausen 及び heina の語尾を有する地名が、特にフランク起原であるといふことを確定することが出来ない。

殊に古文書及び事務書類は物語史料によつて解釋される場合に、初めて非常に理解し易くなる。イー・エー・フリーマンは文書のない記録は少くとも文書なくして解釋し得られるが、文書は何等かの記録がなければ到底理解し得られないといふてゐるが、誠に正當な詞である。之は必然的に古文書の性質に關係してゐること、之はある關係から生じたもので、多くは後世に理解され様といふ問題も目的も有つて居らず、只最も近い關係者に理解されんと欲し、また解釋されるべきものである。かくて屢々その性質上、常にその關係から遠く離れてゐる同時代及び後の時代によつて理解されるべき物語史料が、屢々後世の研究者を助けるのである。

(615)

之に對する範例はウオームス協約である。王と王國僧侶との非常に厄介な位置に關する決定は、當時の國家制度の最重要な問題で、假令はこれについては次の詞によつて述べられてゐる。*Electus regis dicitur a te per scriptum recipit et quia ex his jure tibi debet fructus* 論議者及び同時代人は之によつて何が考へらるべきかを知つて居り、王國僧侶は傳統的權利に基き、特種の附與によつて王に奉仕すべき責任の存するのを知つて居つた。然し吾人は之を古文書の詞かゝるは考へ得られない。只この時代の唯一の記者ゲルホー・フオン・ライヘルスブルグ (Folbold von Reichenberg, *Die investitione Christi, in: Opem iustitia our, F. Schönböcker I 79, in Mon. Germ. hist., Fribelli de Jure Pal. III S. 338, 246*) が協約の内容を更に記述するのによつて、吾人は説明を與へよう。*imperator... electiones atque investituras libere ecclesie remisit, ita ut electus vel consensus domini imperatoris vel regis regula per scriptum acceptet, facto sibi iuramento et iustitie iurata* かゝるして吾人はかの詞によつて最も嚴格な封建的誓約の表仕を考へてゐること、また同時に王國僧侶の王に對する傳統的な封建義務がこの協約によつて更に保證されたことが判る。

(d) 最後に個々の史料が役に立たない場合、問題となつてゐる事實に關係せる全體の史料及び從來吾人の知られてゐる事實の全體の關係からの解釋が助になる。かゝる攝略決定の利用は幾多の方向から見て、解釋の非常に有效な原則である。

第一に、吾人は問題となつてゐる事實を今も發展列の知識によつてその意義の理解を得る。

吾人が考古學的知識によつて、燄石の尖つた片がある文化階段からの矢尻であることを認め、或は書學的、古文書學的知識によつて、パピルスの巻物がローマ皇帝時代の書物であることを認め、或は黄金文書及びその規定の意義をドイツ王國制度の發展から明瞭にし、或はタキツスのゲルマニヤ、第二十六章の二様の意義を有する詞 *arva per riuos mabant et superest ager* を土地制度の全體の發展から解釋せんと試みる場合(マイツのドイツ制度史 Walt, *Deutsche Verfassungsgeschichte* 第一、三版、第一一頁、

ル、シリーゲルのドイツ法律史教科書 Le. Salverton, *Lehrbuch der deutschen Rechtsgeschichte* 第五版、紀元一九〇七年、第五六頁を参照せよ)

第二に、吾人は事實の生じた原因、條件、核心、或は(又は)また事實が伴ふ作用、或は事實が残した痕跡を知ることによつて、その事實を理解することを知る。之は殊に制度、觀察、狀態に當てはまる。この點についてフステル・ヅ・クランデ *Fustel de Coulanges* は制度が明瞭に、赫々と、有力に、卓越して現れる世紀は、決してそれが形成された世紀でなく、又は實施された世紀でないといふてもよい。之が出現しなければならなかつた原因、之が元氣と活氣を得た事情は屢々之に先立つ世紀に屬するといひ、而して彼はそこからその研究をばある單一の時期に限るものは、この時期そのものに依つて、重大なる誤謬に曝されるといふてゐるが、至當の言である。こゝに「肉體的遺物」の利用についてその以前の發展階段への逆推が追想さるべきである。

之に關する範例は、ウオームス協約の規定の個々のものが提供する所で、吾人が *et quae ex his jure tibi debet fructus* なる詞の意義はゲルホーの文句を離れて、協約以前に王國僧侶の國家的義務が如何なるものであつたか、また其後如何なるものであつたかを研究することによつて明瞭にし得るが故に、先に述べた同じもので判る。——また他の例を挙げれば、タキツスのゲルマニヤの或文句は古ドイツ貴族が特殊の位置を有つてゐたと理解すべきであるかが疑はしい場合、最原始的に残つてゐたドイツ民族ザクセンの後の關係からしてタキツスの如くに理解さるべきことを企てねばならない。——大仕懸の例としては、先きに述べたカロル大帝戴冠式に關して参照せよ。——なほラテン的、ドイツの文字の非常に必然的な發展も優逸な例を提供するものである。假令は紀元十一—十二世紀に活字に現れる輕い加線、及び割線は、之から紀元十二世紀の間にかの破毀された文字の根本的構成が生ずることを注目したければ、之を全然無意義と考へ、寧ろ全然看過するであらう。



第三に、思想圖に於いては、吾人は自己をその史料が作られた範圍の知識及び意向に置き換へて、この時代に於いてかゝる印象の下に、かゝる表示によつて、何が理解せられてゐるか、當時その關係に於て習慣、氣分、一般の見解等が如何なるものであつたかを研究することによつて、同時代人の理解が基いである假定を領有せねばならない。かかる問題の答辯に屬するものは、既に今は第二節に説明したが、他は之を第四章、第二節に取扱ふこととする。

(e) なほこの上に、吾人は全體の關係をも相互的に解釋し得る。種々な事實例の同様な、或は類似の事件の比較觀察によつて、即ち所謂比較法によつて行はれる。解釋のかゝる重要な補助法の可能は、人性及び之に作用する要件の一般的相似により、種々なる民族及び人間集團に於ける發達の順序が半ば一致して、半ば類似して繰返されるによる。勿論——之は十分主張せらるべきものではない——吾人が先に十分説明した如く、かの同似是最も一般的な傾向に於ては絶對であり、然らざる場合は只比較的に現れるが故に、全然只類似してである。もし然らずとせば、實に一般に何等の歴史なく、何等の發展がないに相違ない。然しまた類似は比較によつて非常に意義ある説明を得るに足るもので、吾人は之によつて個々の經過及び關係に於いて多少一致せる一般發展過程を認識し、又かのものを非常に明瞭に、非常に深く理解するを得、個々の現象其物の觀察に際しては發見されず、或は個々の場合には知られないが、ある他のもの、また其の他のものには明かになつてゐる要件及び因果關係に注目し、また個々の現象を一般生理學的、心理的、文化的原因及び條件の光明に照すを得、また何がその現象に特殊的であり、典型的であるかを區別するを得る。群衆現象中に平等なるものを觀察する科學は之に關する重要な任務をなすものであるが、之については吾人は既に度々指示した所である。(第一篇第四章c, e, f 及び遺物の解釋の章)比較法の遠限は彼處に、またこの篇の第四章の一般要件を取扱ふ所に十分説明するが、その利用の條件及び限界については、直ちに次の節に説明する。

(f) 個々の史料の間違つた解釋よりも、更に深く史料相互の間違つた解釋を避ける様に警戒しなければならぬ。之はこのものの利用に關する方法的衝突が非常に一般的であり、非常に大きな範圍に及ぶからである。

殊にこゝにも常に總ての歴史的研究の基礎的主題が注目されねばならない。即ち考證的に精査された事實が取扱はれねばならぬ。之を思ひ起すことが決して無用でなく、更に重要である。ある史料から引出された意味が他の史料に限られてゐる意味と相反することによつて生ずる矛盾も內的考證の原則にとつて決定されねばならない。

更に史料の相互的解釋に際しては、實際一方が他方と關係してゐる様に資格づけられてゐるかを觀察せねばならない。斯る資格は史料が、之に關係してゐることに基づく場合、斯る關係が實際に成立し、また之が假定されてゐる方法で成立することが絶對に確信されねばならない。然し實際かゝる明瞭に見ゆる要求に對して屢々違背してゐるものである。假令は最近のフランク制度史の研究が或は主としてローマ的基礎から、或は單にゲルマン的根源から引出され、また解釋された事により、長い間争はれた。西方及び東方ゲルマン族の神話が長い間北ゲルマン神話によつて説明され、殆どこのものが一般ゲルマン神話を代表するものの如くに考へられた。クリスト教的觀察が民族的觀察に及ぼす影響は、屢々後者を説明する爲にどこまでも採用されたものである。ユリウス・ブラウンの傳説の自然歴史 *Juli. Braun, Naturschichte der Sage, München 1914, 2 Bde.* は解釋の爲の根本史料の不當なる採用及びその利用に關する特に重要な例を供してゐる。なほ常に民族生活の廣汎な範圍に於ける互に類似してゐる現象を説明する爲に、一面的に引用の原則、或は共通起源の原則を利用して個々の場合の事實を公平に試験しないことにより、非常にこの點で失敗をする。かゝる試験の標準は既に記錄の一致の節に述べた如く、史料解剖の原則によらねばならないが、只形式的の一致よりも内容的の一致を取扱はねばならず、また一般心理的、また文化的類似的基礎が著しく注目されねばなら

(620)

ないので、大抵その結論は十分明白に現はれて來ない。

互に解釋されてゐる史料が親似的に關係してゐない場合は、此等の史料が同じ事實、同じ箇分に關係してゐることが正確にされなければならない。之は先に擧げた例、殊にオットー・フォン・フライツングの文句に關する先のものから知らるべきである。

制度、觀察、狀態に關して、完成され、完了されてゐる現象から全體の過去の發展を解釋して、屢々制度、觀察等が形式上、また内容上、その後の構成に至るまでに重要な變化を爲してゐることを考へないと、當然常に誤謬に陥るものである。制度史は常に之に關する例を與へてゐる。「意義の變化」といふことは言語的解釋の範圍に於けると同じく、こゝにも「時代の變遷」を考慮せねばならない。また屢々制度等は單にその構成或は作用の高點、或は破綻點のみを、度々單にその顯著な作用のみを注目し、而してその前史を考へずして解釋する缺點がある。法王の世界統治の組織をインノケンツ三世、或はボニファーツ七世の創設として現し、之に先立つものを考へない如きは之である。

然し最も多く、また最廣く行はれてゐる矛盾は比較法の應用の場合に存する。之はこの場合、上記の種類の誤謬と、この方法にとつて重要である斷定手續の間違つた取扱法とが屢々結合せられるによる。之は先に(c)の終の記述から明白である如く歸納法と比較推論とによつて行はれるので、而して條件といふ詞は適當でないかも知れないが、兩者は屢々内在してゐない或條件に結合されてゐる。

歸納法的推論は知られてゐる場合の比較的非常に多數なものに適合する關係からして、その範圍のまだ知られてゐないものについて、相當する關係を結論することである。研究が知られてゐる場合の不十分な數に基く場合は、間違つた總括といふ誤謬に置かれる。かゝる間違は歴史的研究のある範圍には正しく特有的で、エル・シタインは之を總ての

人種的、社會學的研究の大缺點であると言つてゐる。(D. Stein, Die Sozial Frage im Licht der Philosophie 1897 S. 71)

ニル・ヒルナン・モルガンが彼の著作殊に古代社會 J. H. M. Morgan, Ancient Society, New York 1877 に幾多の原始民族の結婚形式の觀察に當つて、總ての民族は本來群衆的に不規律な結婚を爲さる團體、雜婚 (promiscuity) をなして生活し、一定の階段、現今は母權的制度を通過して高級文化の一夫一婦的形式に到達したもので、從つて吾人が單にその結婚形式の最後の階段のみを知る民族もかの前階段を通過したことを十分に假定されると結論してゐる。タブリウ・ウ・ウエスターマキ人類結婚史 W. Westermarck The History of human marriage, London 1891 はモルガンの方法的缺點を證明し、ことに彼の歸納的結論は不十分な材料に置かれるものゝ多きをいふが、之が更にエル・ヒルナン・モルガンの種々ある經濟的文化階段に於ける習慣及び法律 R. Hildebrand, Sitt und Macht auf der verschiedenen wirtschaftlichen Kulturstufen 1896 第一部、第一〇頁、ヒルナン・モルガンの家族の形式と經濟の形式 R. Gross, Die Formen der Familie und die Formen der Wirtschaft 1896 によつて確定されてゐる。——ヒルナン・モルガンが上記の書に於て他の範圍についても同じ誤謬をやつてゐる。彼は第一八三頁に古代ロシア人、インド人、ケルト人の村落團體は自發的に團體的に成立したのではなく、初からして統治同盟として成立したものと思ふことを論定してゐる。——彼は先づ「總て此等の民族には」といひ、而して更に次の文句「ドイツに於いてのみ之が違つてゐる筈はない」とつゞけてゐる。かくて全然不十分な歸納的結論によつて「總て此等の民族」の代りに「總ての民族」を引出してゐる。之は近來非常に多く行はれてゐる間違つた論の典型的な基本形式である。

これ／＼考證を経ずして、平等な價值を有する確實な證據として採用されてゐる非常に違つた確實性を有する事實からして、常に屢々この種の結論の個々の分枝が成立することを附言する。而して之が事實に關する確實な知識を得ることの確實に又非常に困難な場合、殊に原始民族の報告の範圍に成立するもので、この際その報告が同じ時代、同じ場所、同じ文化階段に屬するかを十分研究することなくして、之を總合することが珍しくない例である。要するに簡

(621)



單なかゝる人種學的研究の多くのものには、史料考證の最簡單な法則の存在すら知つてゐないと思はれるのであつて、確かに十分に觀察されてゐる。

かゝる歸納法の非方法的な利用と相並んで、度々比較的決論の亂用がある。この場合、觀察された場合や對象の数は問題でなく、そのものゝ根本的特徴の明白な一致が問題であり、それから他の證明されない特徴の一致を多少完全な同似性に至るまで推論するのである。この場合度々發展過程に於けるある非根本的な、或は十分に證明されないまた輕率に採用された一致、又はある關係に於ける一致をば、どこまでも、また總ての關係に於てその經過を平等ならしむる爲に、同似として説明することに満足してゐる。之は時代の相違を注目せずして、昔の時期の關係、觀念、觀察、制度をば近代のそれらを利用して解釋する場合にもあてはまる。かゝる誤謬の決論は大抵民族の發展が、ある範圍、また總ての範圍に於て、常に、また至る所に同じ經過を取るといふ多少意識されてゐる主義的の假定、即ち吾人が既に根本的に不都合のものとして指示した假定によつて助けられてゐる。この場合制限的に發展は「大體に於て」「同形である」と追加されるが、かゝる制限にも拘らず發展の個々の同似まで採用し、而して上述の要領を十分に證明せずして、ある民族に於ける、またはある範圍に於ける經過をあるものに、或は少數の他のものに觀察した經過によつて解釋することが排斥されて居らない。かくして社會的、自然科學的學派のかの「文化時代」「文化階段」「型」「通常發展」等が成立し、此等のものが一般有效な法則或は觀念として現され、之に個々の發展を總括し、また此等のものを根本的に同似なものとして互に解釋してゐる。

之に關する典型的な例は「歴史と自然科學との關係」「歴史の本質及び問題」の註に述べたラムブレットの「文化時代」、多くの經濟學者が論じてゐる經濟的發展階段、ロム、の智力進化の三階段論二重列第五節、第五章、第一節を参照せよ）及び其他の類似の著

察で、その非常な誤謬については私は七節の條に、また其他の所で繰返して之を述べ、同時にその間違つた要求を挙げて置いた。古代の關係につき近代關係を以て輕率な比較的結論を與へてゐるものにつづけば、ヨツヤ・クロイマイエルが史學雜誌、紀元一九〇五年Ⅹ、Ⅺ第五九卷、第一頁に眞實なる、及び誤れる事實批判といふ論文、J. Krenniger, Wahr und falsche Analogie に軍事制度に關し具體的な應用を行ふてゐる。またツニン・ボロウスキのカタリツク神學雜誌、紀元一九〇五年、卷二十九、第二八頁にある原始クリスト教制度史に關する方法的豫備問題 Stan. v. Lugin-Jorokowski, Methodologische Vorfragen zur neuhellen Vorlesung-Gesellschaft を参照せよ。

かゝる類似の同似性として非方法的に利用することが、或民族に關する事件及び狀態に關して積極的に提出されてゐる報告をば、先きに記述した方法によつて結論せねばならないと考へられる外見的な通常發展によつて都合の好い様に、無闇に強制し、變更し、或は全然無視するといふに至る。

之については前に舉げたヒンデブラントの作は複雑な例である。彼は一般的に總ての民族は半牧人時代の階段に於いては、富有的な家畜所有者に從屬してゐる貧乏な民族仲間によつて必要な農業が營まれたことが確證し得られると考ふる。彼はこの觀察から、古代ゲルマン人の關係を記述し、また彼はケーザル及びタキッスの報告を次の方法(第五七頁)で解釋した。ケーザルはガリヤ職記の卷六第二二章に *nasciturus ne princeps in annos singulas griffus cognationisque hominum, qui tunc coeuerant, quantum et quo loco visum est agri atquebant agque anno post alio transire cogunt* といふ。之がヒンデブラント(第九二頁)によれば「民族に於て特に何等の職務的人物ではなく、多分實際の權威的人物である富有的な家畜所有者が貧乏な部族集團に單に所々に、限られた範圍に、また長時期でなく、農業を許した」といはれて居り、而してかゝる方法の動機として、また同時に彼の解釋の理由として、次の如くいふてゐる「富人或は大なる家畜所有者に初め一切の農業を敵視し、また信用しなかつたが、之は農業が彼等の權力を危うくするが故ではなく、寧ろ一切の農業はその性質上常に狩獵や牧場に多少の土地をさかねばならない傾向があるからである」——かくて彼はケーザル自身が彼の報告してゐる事實について引證してゐる論據をば簡單に「高級な文化階段からの後日

的な回想」として排斥してあるが、假令この論據そのものにかゝる回想であるにしても、彼はこの論據をケーザルの詞に存する意味に、絶対に適合せしめず、かくてケーザルからは彼(ヒルデブランド)が解釋する如くには全然考へられ得ない。ヒルデブランド(第七二頁)がかゝる方法で一般的に出被した判定、即ち政治的見地に於て、ケーザル時代のゲルマン人の關係はなほ吾人がタター人及びベズーインに通過する所と迄末も異ならなかつた」といふ判定に、個々に於ても到達することは更に怪むを要しない。——ヒルデブランドは彼の人種學的比較に便ずるか爲めタキツスの報告を無理強ひをしてゐる。彼は(第一〇一頁)このものに關し、*sedem* をローマの *sedem* と同視することによつて、セルビなる詞を從屬的で、農業的な人民と説明し、タキツス時代にはコロネがまた自由な貴賤人であつたこと、また作家が之を一般的ではなくある關係に於てのみ(ゲルマニ第二五章)かのゲルマン人のセルビと比較してゐることを注意しなかつた。彼はまた第二十六章の *cultures* をばこのセルビと同視してゐる。彼(第一二〇頁)はここに *ab multo in vicia occubant* といふ詞を「土地の共同開墾地」と理解し、*secundum dignationem* (第一二九頁)をばそこで「近視程度に應じて、ジツベの族長からの距離に應じて」と解釋せしめを得なかつた。——かゝる方法では、直接に提出されてゐる報告の詞や、報導を無遠慮に取扱はねばならぬと考ふる場合は、寧ろ簡單に一般にかゝるものに關係しないこと、只ゲルマン人は當時半牧人であつたことを知らねばならないと證明すべきであり、他は自然一般知られてゐるある時代、ある場所、ある民族のある他の半牧人の同一狀態に應じて判定すべきである。それで勿論かの最も簡單な法則が如何なる點まで曲解されたかは十分明瞭に示されたと思ふ。

## 第二章 綜合

史料が提供する事實をば、それらを連絡する意義で結合するのが、「綜合」の問題である。

明かに歴史の事實が如何に相互に關聯してゐるかの種類及び方法、之に相當せる事實の結合を如何に認識し、また